令和５年度　第１回　吉田町総合教育会議　会議録

１　開催期日　令和５年６月５日（月）　午後３時００分

２　場　　所　吉田町役場　町民ホール

３　出　席　者　田村 典彦 町長、山田 泰巳 教育長
塚本 成男 教育委員、北澤 雅恵 教育委員
増田 真也 教育委員、中村 成宏 教育委員
事務局　粂田 真男 学校教育課長、中山 孝宏 生涯学習課長
山村　加奈子 学校教育課長補佐、水嶋 浩之 主席指導主事
平井 奉子 指 導 主 事、浅井　健　指 導 主 事
久保田 智幸 社会教育統括、川本 貴浩 教育振興統括

４　議事内容

１　開会

〇事務局

開会に先立ち相互のあいさつを交わしたいと思います。一同御起立をお願いします。一同礼。御着席ください。

ただいまから、令和５年度第１回吉田町総合教育会議を開会します。本日はお忙しい中御出席を賜り誠にありがとうございます。本日の進行を務めさせていただきます吉田町教育委員会学校教育課の粂田と申します。よろしくお願いいたします。

早速ですが、お手元にお配りした資料の次第に沿って進めさせていただきます。始めに、吉田町長から御挨拶申し上げます。

⑴　町長あいさつ

〇田村町長

皆さんこんにちは。今教育長に今年はおいくつですかと聞いたら、６４歳でした。この中で一番年なのは私なんですね。私は、いい時代に生まれて、あまり悲惨な日本の姿を見ることがなく、いい人生を送っているんじゃないかなと、そのような感じがしました。１９４５年に戦争も終わって、成長してきたのですが、単純な話、ワープロはありませんし、パソコンもありませんし、インターネットもありませんし、あるのはラジオぐらいのものでしたね。教科書を見ながら先生

と話をして、非常に閉鎖的な空間でしたが、それはそれなりに楽しくて充実した時代だったんですよね。それからラジオがテレビに変わって、その次にワープロが出て、それからパソコンが出て、あらゆる教育のというか、生活の環境がいろいろな機器でもって激変しているんですよね。それに伴って、情報が昔は非常に単純な情報だったので、今はものすごい勢いで情報が増えています。幾何学的に増えていますよね。それを毎日毎日、自分の生活や周りの人の生活も動いているのですよね。そうするとまさに量であり、内容であり、我々が教わってきた時代とはまるで違った中に今の小学生であるとか、中学生とかそういうお子さんがいるわけですね。そうすると、時々考えるのですが、そういう中で一体教育というものは、どういうふうなことを、何を目的に、どういう人間をつくろうとしているのか。非常に昔とは違ったものですよね。そう考えた時に、吉田町の教育というものは、基本的にはそういう情報交換であるとか、そういう中にあるわけですから。まあ申し上げているとおり、この町に生まれた子供さんが、小学校であるとか、中学校、最終的には全人的に考えなくてはならないのでしょうけれども。どういう教育を、どういう目的で、どういうふうな人間をつくろうとして施していかなければいけないのかと。我々も今一度ですね、教育の原点に立ち返りながら考える必要があると、そんなふうに思っています。

この４年の教育大綱が終わって、新しい教育大綱を作るのですが、今日はそのために皆さんに集まっていただいているのですが、そういう中で、どんなことをどんなふうに考えていくのか。原点にある程度戻りながら考えていく必要があるのではないかとこんなふうに思っています。皆さんも様々な御意見を伺いながら、新しい教育大綱を作ってまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

〇事務局

ありがとうございました。次に、教育長から御挨拶をいただきます。

⑵　教育長あいさつ

〇山田教育長

改めましてこんにちは。今、町長からも話がありましたが、教育大綱が本年度で４年を経過して、もう一度見直して、来年度から、さあ、どうしていこうかということの話をしていくわけですが。この４年間の中でも、コロナを始めとして、大きく社会が変化したというか、今のいろいろなところで言われている予測困難な時代と言われますが、これから先というのが一体どうなっていくのか。その予測困難な時代を乗り切っていく子供たち。これからどんな力を付けていかなくてはいけないのか。そんなことも含めて、向こう４年間の教育大綱を改めて本

年度策定していかなければいけないことになります。ですので、私達も先を見ながら考えなければいけないのかなと思っています。ちょうど今、文部科学大臣が中教審に諮問をしたということが報道でも流れました。今回の諮問については、令和の日本型学校教育を担う質の高い教師の確保のための環境整備に関する総合的な施策についてということで、具体的な内容を見ますと、教職員の働き方改革の在り方、処遇改善の在り方、学校の指導運営体制の充実の在り方というのが大きな３本だったのですが。全てこれは教職員の関係のところが窓口にはなっているのですが、その先には何があるのかというと、子供の成長であったり、子供の学びの充実のために、教職員の在り方というのは、どういうふうにあったらいいかというところにつながってくると思っています。

吉田町においても、この教育環境整備というのは、予算も付けて教職員にとって、子供にとって、保護者にとって、更には地域にとってということで、生涯にわたって学び続けるような、そうした人を育成するために、いろいろな教育環境整備をやっているのかなと思います。今日は是非皆さんの意見も聞かせていただきながら、今後どんなところに重点を置きながら進めていけばいいのかというところが、いろいろ洗い出せればいいかなと思っています。どうぞよろしくお願いします。

〇事務局

ありがとうございました。それでは議事に入ります。ここからの議事進行につきましては、田村町長にお願いします。

２　議事

⑴　吉田町教育大綱について

〇田村町長

それでは、次第に沿って本日の議事を進行してまいります。本日の議事は二つでございます。まず最初に、「吉田町教育大綱について」を議題します。事務局に説明を求めます。

〇事務局

それでは、教育大綱につきまして、御説明させていただきます。まず最初に、資料№１を御覧ください。令和５年度吉田町教育大綱・ＴＣＰトリビンスプラン策定スケジュール案でございます。後ほど詳しく説明させていただきますが、現行の教育大綱期間につきましては、令和２年度から今年度までの４年間となるため、次期の教育大綱を今年度策定することとなります。

つきましては、大綱を策定するまでのおおよそのスケジュールでございます

けれども、今回策定する大綱は、第６次吉田町総合計画の前期基本計画に合わせて策定するため、この計画の策定スケジュールを考慮しながら、まず一番上の欄にあります本日の第１回総合教育会議を皮切りに、その下の欄の教育委員会、さらにその下、後ほど説明さていただく吉田町教育推進委員会においての協議を経て、教育委員及び教育推進委員会の意見を取り入れた大綱案を取りまとめていきたいと思っております。

その大綱案につきましては、一番上の欄にお戻りいただきまして、１１月に開催予定の第２回総合教育会議におきまして御協議いただいた上で、おおむねの大綱案を取りまとめ、さらにパブリックコメントを経て、町民の皆様の意見を取り入れた最終案を取りまとめ、最後に３月に開催予定の第３回総合教育会議におきまして御協議いただいた上で、決定したいと考えております。

次に、資料№.２-１の「吉田町教育推進委員会設置要綱」を御覧ください。現在の教育大綱を定める際にも設置いたしましたが、今回も大綱を策定するにあたり、学校、地域等で教育に従事している方や精通している方をメンバーとする教育推進委員会を設置しまして、そこで大綱に定める施策等を協議していただき、この委員会から出された意見を大綱に取り入れることで、より地域の実情に応じた施策を制定したいと考えております。

要綱の第３条を御覧いただきたいと思います。この委員会は、１０人以内で組織され、委員については、学校教育に従事する者、社会教育に従事する者、ＰＴＡ関係者、学識経験者のうちから町長が委嘱することとなっております。

併せて資料№.２-２を御覧ください。現在、このような各方面の方々から構成する委員会を設置する方向で考えております。

それでは、資料№.３を御用意いただきたいと思います。資料№.３は、現行の吉田町教育大綱となりますが、その２ページを御覧ください。まず、一つ目の丸、大綱の趣旨でございますが、地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部改正を受けまして、同法第１条の３に基づき、町長は、国の教育振興基本計画を参酌した上で、地域の実情に応じて教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱を定めることになりました。

次に、二つ目の丸、大綱の性格ですけれども、この大綱は、同法第１条の３の規定に基づきまして、吉田町の教育における基本的な方向性を明らかにし、かつ、本町の最上位計画であります吉田町総合計画の分野別計画と位置づけられるもので、今後の町の教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の指針となるものですございます。

次に３ページを御覧いただきたいと思います。一つ目の丸、大綱の期間ですが、現大綱は、令和２年３月に制定され、以後、現大綱をもとに、当町では様々な教育施策を進めてまいりました。現大綱については、その期間を第５次吉田町総合

計画の後期基本計画に合わせて、令和２年度から令和５年度までの４年間としており、今年度がその最終年度となっております。

そのため、今年度におきまして、この４年間における大綱に定められた施策の推進状況等を評価するとともに、来年度以降の４年間における施策の方針を取りまとめた教育大綱を定めることとなります。

次に二つ目の丸、大綱の構成でございます。この大綱は、教育目標、基本方針、施策の方向性で構成されております。教育目標は、吉田町の目指す教育を明らかにし、基本方針は、教育政策の方針を掲げ、施策の方向性は、重点的に取り組む施策を掲げているものでございます。

次に４ページを御覧いただきたいと思います。ここに現大綱の教育目標としまして「生涯にわたり　学びあい　高めあう人づくり」が掲げられています。

この教育目標は、平成２８年度から令和元年度をその期間とします最初の教育大綱から引き続くものでございます。

ここで、少し国、県、町の教育に係る諸計画について、簡単に説明させていただきます。町では、今年度策定予定であります令和６年度を初年度とする第６次総合計画において、「豊かで活気にあふれ　心を魅了するまち　吉田町」を将来都市像とし、これに向かって教育分野では、次代を担う心豊かな人を育むまちづくりを掲げ、社会を生き抜く力を持つ人づくり、心豊かな人を育む活動の推進、心身の健康を保ち、向上心を育む活動の推進を施策の柱としています。

また、参酌する国の教育振興基本計画においても、学び続ける人材の育成、全ての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進、地域や家庭で共に学び支え合う社会の実現に向けた教育の推進等が基本的な方針として掲げられています。さらに県においても、有徳の人の育成、有徳の人づくりを基本理念に掲げています。

このように、国、県、町の計画におきましても「生涯にわたる」「学びあう」「高めあう」「人づくり」というキーワードが掲げられていると言えますが、これらを踏まえ、次期大綱の教育目標について、後ほど教育委員の皆様から御意見をいただきたいと思います。

次に５ページ以降、基本方針と施策の方向性として重点施策が掲げられておりますが、これらがまとめてあります最終ページの体系図を御覧ください。現大綱では、この体系図のとおり、５つの基本方針のもと、それぞれ２つから３つの重点施策が掲げられています。こちらにつきましては、今後、先程申し上げました教育推進委員会等で御意見をいただきながら、今後検討しながら策定していく予定です。

説明は以上となりますが、本日の総合教育会議においては、先ほど御説明させていただきました案のとおりの構成員からなる教育推進委員会を立ち上げまし

て、案のとおりのスケジュールで策定事務を進めていくことについて、委員の皆様の御同意をいただくとともに、次期教育大綱におきます「教育目標」の決定と教育大綱の方向性、次期大綱に望むもの、盛り込むことが望ましい内容等について、委員の皆様の御意見をいただきたく思いますので、御協議のほど、よろしくお願いいたします。事務局からは以上です。

○田村町長
　説明が終わりました。それではこれから、御意見を伺い、協議していきたいと思いますが、最初に、策定スケジュールと策定方法については、事務局が提示した案のとおりでよろしいでしょうか。皆様の御意見をお伺いしたいと思います。

○塚本委員
　提案していただいた案のとおりでよろしいかと思います。

○田村町長
　よろしいでしょうか。分かりました。それでは次に、４ページにあります「教育目標」について、教育委員の皆さんから最初に御意見を伺いたいと思いますが、いかがでしょうか。

○塚本委員
　この教育目標は、前回から掲げられている目標だと思うのですが、前回にも思ったのは、学びあい高めあうということで、地域の皆さんを含めた子供たちの教育はもちろんなのですが、それ以外のものも含めてみんなで高め合って行こうと。吉田町全体で学びあい高めあう。共に高めあおうという意味合いが込められたいい言葉だなと思っています。なかなか大きな目標なので、これが達成できたかどうかというのは難しいのですが、目標は大きければ大きいほど、それを具体化する後の基本方針には、時代に合わせたきめ細かな方針や対策が必要になってくるわけなのですが。目標は皆が共有できる、共感できる大きな言葉で非常にいい目標になっていると思います。
　ただ、一つあるなら、この下に解説文章があるのですが、こちらに関しては、時代が変わっていることもあるので、若干変わってきているところ、それに対する思いも書き加えた、若干変更したものであってもいいのではないかと思っています。

○田村町長
　その辺はどういうふうなことですか。

○塚本委員

町長からあいさつであったように、ものすごいデジタル化する時代で、情報が増えていて、未知の時代に行く。かつてもそうだったのですが、私ら大人も含めて正解を持ったリーダーがいるわけでもなく、共に暗中模索じゃないですが、未知の世界に踏み入れていかなければならないという。それがチャレンジしていかなければならないことなのか、自分で生きていく力を大人も含めて付けなければならないということが、過去以上に求められている時代ではないかという気がしています。そういう意味では、ここに書かれている大井川の洪水、よく言われることなのですが、吉田町は大井川の中にあったわけで、その洪水との格闘の中でまちづくりがずっとされてきたというのは、歴史的背景として分かるのですが、何かそれになぞらえられない、単純化していない難しい何か。戦いというか生き方をしていかなければいけないというのを感じているので、そういった表現が加えられる解説文になると、より目標が共感され、その目標に対する意味合いも人それぞれレベルの高いものになっていくのではないかと感じています。

○増田委員

この教育目標についてですが、吉田町の目指すところとして、そもそも吉田町に住んでいる住民が、生きがいだったり幸せだったり、豊かさを感じる町にしたいという思いが皆さんにあると思うのですが。生きがいとか豊かさを感じるために人は学ぶ。学ぶ意味というのは、そういうところにあると思っていまして。そういった意味では、学びあい高めあうというフレーズは、そのまま残していただきたいと思っています。学び続けることができる町ということで、教育目標としてふさわしいのではないかなと思います。

この４ページの解説文についても、なぜ学ぶのかと、学ぶ必要性というか、そういったところに触れたら、町民の皆さんにも分かりやすいのかなと思いました。

○中村委員

自分も増田委員と同じ意見なのですが、事前にいただいた資料の中に、次期の文科省の中央教育審議会の教育振興基本計画の中に、社会に根ざしたウェルビーイングの向上というのがあって、その中に今増田委員が言った幸せとか生きがい。それから、豊かさ。そういうようなものが入っていて、それっていいなと思うし、多分吉田町でも求めているのは、そうだと思うんです。そうなってきた時に、教育目標はこのままでも、下に入っている文の中に、そういった豊かさだとか、個人の幸せだとか、そういったものが学んだ先に見えてくるような、そう

いった文言が入ってくるといいのではないかなと思いました。

〇北澤委員

私もこの生涯にわたり学びあい高めあう人づくりという中には、すごくいろんな意味合いが入っていて、一つの目標として掲げる素晴らしい言葉だなと感じています。本当にこの何年かは、コロナの影響を受けて、私達もこんなことが起こるなんてという、まさかの時代を皆さんと生きてきた中で、そこで見えた課題ってあって。やっぱり人としてたくさんの情報量があって、それをどう処理してきたのか。本当にそこで生まれてしまった差別や偏見なんかも本当に課題としてあったことを、私たちも反省しなければいけない部分が見えてきて。そういったところを私達は次世代につなげていかなければいけないというのを改めて感じた時代を通ってきたので、そんな中を本当に、何が起こるか分からないということを踏まえて、新しい課題に向き合える人づくりというのは、本当に１人ではできない部分がある中で、吉田町が掲げるまちづくりの中で、本当に次世代を担う心豊かな、本当に人を育むということが大事なんだなというのをすごく感じて。この文章の中にもそれが入っているのですが。やはり時代が少し反映されたような文言をもう少し足されていくと、つなげていけるのかなと感じました。

〇山田教育長

今、委員の皆さんのお話をいろいろ聞きながら、心豊かなという話がありましたが、要は、私達が育てていっている子供という、その子供のよく人間力とかっていう言葉を使ったりしましたけど。総合的にその子供たちが育っていくことを願っている部分が皆さんの発言から感じ取れて、例えば子供は学校で学んでいますから、授業でやっていますから、もう学力が付くのは何としても学力を付けてもらいたいという思いがあるというのは大前提としながらも。ただそこだけにとどまらずに、豊かな心も育ってほしいし。人としてどうやって成長していくかといったところが、とても大事だのだというところを、皆さんがお話をしてくださったのではないかと今思いました。

生涯にわたりという言葉が冒頭に目標の中に入っているのですが、先ほど中村委員が言ってくれた、次期教育振興基本計画の中には、学び続けるという言葉が入っていますね。学び続けるというのは、要は、子供たちは義務教育を９年間で終わって、その後また高等教育を受けたり、社会に進出していったりするのですが、我々もそうですが、大人になっても何らかの形で学びというのはある。なので、学校教育の中だけで完結するのではなくて、生涯にわたって学び続けるのだと。そういうような人をつくっていきたいということが、ここの生涯にわたりという言葉の中に入っているのだろうと思いました。

それと学びあいとか高めあうという、何々しあうというのは、これは１人でやるんじゃないよという意味合いがあるのかなと、私は受け止めています。いろいろなところで主体性って大事だと言われますが、それは決して独りよがりであったり、孤立であったりということではなくて、自分がどう考えるか。そのことを友達と話をし、人と話をして、更にいろいろな意見を聞きながら、自分の考えを再構築していくと言うか。そこでまた新たな考えができ上がっていく。より良いものができ上がっていく。そうした意味合いを考えれば、学びあったり高めあったりするという、何々しあうというようなことというのは、とても人間の成長にとっては大事なことなのだろうと思います。なかなか定石がないと言うか、答えが一つではないようなことがたくさんあるものですから、じゃあ今のこのことについてどう乗り切っていけばいいのか。どう解決していけばいいのか。もっと言えば、まずは何が課題だということを自分自身が感じるかどうかということから、その課題を見つけてその課題を解決しようとしている。そうしたことの中で、今、協働的な学びが言われますが、学びあい高めあう、そういうような人をつくっていこうという、この吉田町が平成２８年に掲げたこの目標というのは、今のこの状況の中であっても、十分目標として置いていけるものではないかなと私も感じています。なので、今、教育目標をどうしましょうかという話なのですが、自分としてもこの目標自体は大きく変える必要はないのではないかと思いました。

皆さんからお話があったように、じゃあその下の文章のところをどうするのかというところで、この教育目標に込めた願いというのを、どうやってここにいろいろな要素として入れていくのかというようなところを、より分かりやすく作っていけば、これからの世の中を生きていく子供たちに、この目標がどうかかわっていくかというところにつながっていくのかなと思いますので。そこについては今後また検討していけばいいと思いました。

〇田村町長

私は思うのですが、生涯にわたり学びあい高めあうと。これものすごく綺麗で非常に本質を突いた文言になっているのですが。先ほど塚本さんがですね、これまでの成功体験が次のいろいろな問題を考える時に、そのままいきますかというと、必ずしもこれまでの成功体験でいけるかと言うと、なかなか難しい世の中になってきましたよね。吉田町は、小学校教育の象徴的なものとして、この前ね、運動会で見たんですよ。最初ですね自彊小学校に行って、住吉小学校に行って、中央小学校に行ったんです。でね、最初の自彊小学校で運動会をやっていて、みんな子供さんが主役でやっているんですよ。子供さんにある程度任せて、先生は補助的なところにいるんですね。今まではそうじゃないですよね。先生方がスケ

ジュールを作って、いろいろなことをやっているんです。そうではなくて、自分達で考えさせて、自分達でやると。そういう、まずは自分達一人一人が、どんなことをやればいいのか。どんな競技をどんな形で進めればいいのか。子供たちに任せようとしている。一つのね、この時代を泳いでいく人間の本質的なところを、運動会という場面の中でやらせている。非常に感心しましたね。

だから、やっぱり一人一人が、先行き不透明な時代をどんなふうに生きていくかというのは、みんなで考えるとか、自分１人で考えるのではなく、集団の中でそれぞれが考えて、また意見も出し合ってやっていくと。そういうのを見ていると、非常にシンプルなんだけれども、非常に先を見据えた教育というのを運動会という場を設定してやっている、そういうふうな光景を見ました。これはいいよなと。だからそういうふうな学ぶ姿勢というものを、非常に小学校という幼い段階からやっていくと。当然のことながら、小学校の１年生から６年生、形を変えて、１年生からそういう中において基本的な一つの物事に対処していく時の基本的な姿勢を学んでいく。お互いにやっていく。そういうふうなことを私は、生涯にわたり学びあい高めあうというのは、非常にいいなと思いますね。非常にシンプルなのですが、この間運動会を見ながら、これはいいなと、これについては、私はいいのではないかなとそんなふうに思いました。

ひとつ個人的なことかもしれませんが、塚本さんの家の家業は、新聞販売ですよね。数年塚本さんと話していると、疑問がおそらく塚本さんの中に芽生えてきているんですよね。新しい一つのことをやっていると次のことを、そういう塚本さん自身も自分もこういうことをやって大丈夫なのかと、そういう時代認識で、じゃあどういうふうにやったらいいのか。そんなところを塚本さんの中に見るのですがどうですか。

○塚本委員

一番下の子供が高校生なんですが、トイレにいろいろな標語が貼ってあるんですね。そういうのを見ると、ずっと貼ってあるのがあって。学ぶことが楽しいと思えるようになって、初めて学んだことになるみたいなのがあって。あ、なるほど、楽しいと思えばきっとこの人、頭が良くなるんだろうなみたいに、単純に毎日思うのですが。そういう人が増えたらいいのだろうなというのは常々思っています。今町長からお話があったように、生きていくことが学び。学びっていう言葉だと、学という言葉があるので難しいというイメージが。学校は教育を受けるところなので、だからだと思うのですが。学ぶということって面倒くさいと言うか大変だというイメージがあるのかもしれないのですが。実はそれって生きるために不可欠なことで、実はその先に喜びがあるという楽しいことだというのを伝えたいとか。この言葉で目標の中に学びあいというのが入ってくる以

上は、学ぶことはそんな難しいことではなくて、日々あることで大人も子供もみんな楽しいことだし、豊かになるんだよというのを伝えていきたいと改めて思いました。私も今、日々学びです。

○田村町長
　北澤委員は、子供さんが自彊小学校で、６年生卒業式、今、高校生でしょ。本当に成長していく自分の娘をずっと見ているわけですよね。どう思いますか。

○北澤委員
　あっと言う間に大きくなっちゃってって思うのですが。上の子は大学３年生になってしまって。上の子の方が先日車を購入しまして。ガソリンを入れた途端に何時間も帰ってこないっていう。自分の中では子供だと思っていたのですが、本人は大学へ行って、自分で免許を取って、ちゃんと自分の中で日々成長して、本当に私達と変わらない、二十歳を過ぎたのでね。変わらない立場になったと思うのですが。まだまだ幼さが残っていて、まだまだ社会に出るまでの教育というか、学びが足りていないというのはすごく感じて。ちょっと親としては、いつまでが子育てなのか。この子の子育ては、手を掛けることはしなくなったのですが、まだまだ社会に出すまではと、心の中では少しあって。まだ自分の目が、ちゃんと自分でしっかり見ていなければなというのは、すごく感じているので。娘も高校２年生になって、その先の進路を考えた時、やっぱり自分の夢とか目標を本当に現実味を帯びた、自分が社会に出て働くということと同時に、自分のやってみたい夢をしっかり、それこそ楽しく。自分がやりたいっていうような目標を持ってくれて、それが日々強くなってくれればいいなと思いながら見ているのですが。自分も通ってきた道だと思っていたのですが、なかなか。私とは人格も全然違うのであれなんですけど。親として見るのとか、自分が育ってきたのとはやっぱり違うなっていうのは、すごく日々感じています。

○田村町長
　まだ伴走できますか。そのうち置いて行かれますよ。

○北澤委員
　そうですね。最近は置いて行かれている方が。

○田村町長
　増田さんどうですか。何かありますか。

○増田委員
　最近思うのが、どの仕事も結局同じじゃないかと。それをやることによって、教育長も言った課題を見つけて、自分の頭で考えて、プランを立てて、それを実行していく。それはどの仕事も多分同じじゃないかと思っていて。そういったことを学ぶことで、学校教育の中で学んでいただいて。その学校教育で学んだことが仕事につながって、生活につながるというのが理想だなと思っていて。そういう教育が吉田町でできればいいなと思います。
　それと、先ほどおっしゃった運動会の話なのですが、吉田探究の授業を見た時に私も思ったのですが、先生が先導していかないんですよね。子供らに考えさせて、子供らに進行を任せるのですね。僕なんか、結論をしっかりしたいものですから、誘導しちゃう方なのですが。そういうこともしなくて。結局結論が出なくてもいいというスタンスで、多分やられていると思うんです。すごい教育が変わったなというのを私も感じました。

○中村委員
　やっぱり話を聞いていて思うのは、いつまでも学んで、生涯にわたって学ぶというのは何かなというと、やっぱり自分の可能性を広げることなのではないかなと。学べば学んでいるほど、いろいろなことができるんですよね。学ぶことが少ないと、自分の可能性って少ないっていうか、広げられない。そういう意味で、やっぱり子供たちにいろいろな可能性が広がるようなことをするためには、こちら側もその可能性が広がるようなものを与えられるといいなと思います。そういった意味でも、生涯にわたりということを支えていくためには、それなりの情報というか、整備とか、そういったものが必要になってくるのかなと思いました。

○田村町長
　運動会も吉田探究の授業も、子供たちを主役にさせる、そういうものが始まってきているのですね。

○山田教育長
　一昔前まで、子供たちの実態を学校で語ってもらう時に、最近の子供たちというのは、とっても素直で言うことをよく聞くようになっているのだけど、指示待ち姿勢が多いっていうことがよく聞かれた言葉で。要は、指示待ち。人から何か指示をされれば、それについては一生懸命やるけども、自分から何か考えて動いていこうというようなことが、なかなかできないという課題を、学校が感じていることがあったんですね。で、今は皆さん言ってくれたように、子供たちの発想

の中でこうしたらどうだ、ああしたらどうだという意見がどんどん出てくると。その一つの例が、運動会の企画であったり、運営であったりというのを、僕らはこうしたいけどどうでしょうかと先生に言うようになってきたというのは、先生にも我慢が必要だと思うんですよ。言いたくてしょうがないっていうことが、日常の生活の中でも出てくると思うのですが、それをこうしろああしろと言うか、言い方は違うにしても、どうすればいいと思うと投げ掛けるのかどうか。やり方によって、子供たちが考えるような力を育てていくということができるようになってくるのではないかなと思います。

主体性を育てるという方が、教師の係わりもひょっとしたら難しくなってくるかと。ファシリテートと言うか、そういった力が求められるような形になってくるのではないかと思いますし。今、増田委員が言われたように、大人になってからいろいろなことをどうしたらいいかと一生懸命学ぶよりも、子供の時からそういうような力が付いていけば、大人になってから仕事についても家庭の生活についても、生かせるようになるのではないかと思いますね。そうした意味では、任せれば結構子供たちはやれるぞということが、だんだん見えてきたので。学校の教育の中でもそういうことの場面を作ってあげれば、子供たちにいろいろな力が付いてくるのではないかと思いました。

〇田村町長

教育目標は、一番大事なポイントですから、ちょっと時間を掛けているのですけれども、皆さんからこういう生涯にわたり学びあい高めあう人づくりを基本としてちゃんと示すべきであるという意見でしたので、これでよろしいでしょうか。

それでは、次に次期の吉田町教育大綱に望むこととして、教育委員の皆さんからもっと充実した方が良いこと。逆にもっと改善、変更した方が良いこと。また新たに大綱に盛り込むことが望ましいこと等の御意見をお伺いしたいと思いますので、よろしくお願いします。

〇塚本委員

今も話されてきたことは、最もだと思いつつも、大人の社会と子供たちの社会の垣根がなくなって、子供たちも大人の社会と同じような力を付けさせなければならないのではないかという流れが来て、今言われたような自立した、例えば、プレゼンテーションとか発表を、大人がこれまではＰｏｗｅｒＰｏｉｎｔのような発表を、子供たちが調べてきたものを自分たちで作って発表するとか、手法も含めてなのですが。その時に聞いていて危惧することは、基礎的学力は当然必要なわけで。全て調べれば分かる時代になっても、それを調べるための基礎的な、

例えば、漢字が読めるとか、字が読めるとか、英語がしゃべれるとか、数学の計算ができるとかだと思うのですが。そういったことは、さっき話していたこともやりつつ、そのような形でありながらも、ある程度強制ではないけれども、そういう力を付けるというか。基礎的力がなければ応用はできないというようなことだと思うのですが。最低限の日本人として、吉田町民として学ぶべき学力。力ですね。力を付けさせてあげたいというのは、教育の仕方がいろいろ新しい時代に合わせて変わっていながらも、子供の時分に付けないと、大人になって大きなステップに踏み出していけないということなので。先ほどの可能性の話がありましたが、可能性を広げるためにも、基礎的力を、それは体力もそうなのですが、学力も付けさせてあげたいというのは、さっきの話の流れの中で押さえておきたいことだなと思いましたので。大きな目標の中ではないけれども、基本方針や施策の具体的なものには、どちらも力を付けるということは入れていきたいなと思います。

○中村委員

どうこうって具体的に言えるかってあれなのですが。町全体の教育、大人も含めて施策の中で場を与えるのか、活動する場を与えるというだけでいいのかというのを、読みながら思ったんですね、大綱で。場を与えて、さあどうぞというのは、お膳立てをしてもらってやるという話になっているのだろうなと。それは学び続けることになるのかというと、場を与えれば学ぶかもしれないけど、本当に主体的に学べるかというと、そうじゃないのかもしれないなと思うと、もうちょっと主体的に学べるとか、主体的に活動できるというシステムというか、仕掛けというか。そういうようなものってできないものだろうかと。例えば、基本方針の一つが「身に付けた知識や技能を地域や社会で生かせる活動を推進します。」になっているのですが。例えば、それが他のものを見たりすると、より良い社会づくりに参加し、行動できる人づくりみたいなふうになっていたりするので。そういうような人づくりっていうようなニュアンスになるといいのかなと。どうすればいいのかって、詳しくは言えないのですが。場を与えるだけじゃないようなものがあるといいなと、そんな気がしました。

○増田委員

難しいですね。この基本方針、もう精練されますから、加えるのって難しいなと思うのですが。ただ、国の基本方針でも県の基本方針でもいい言葉だなと思うのが、誰一人取り残さないという言葉があって。基本方針の２番目に強いと言えば入るのかなと思うのですが。吉田町の外国人の人数が非常に今高いという現状もあります。そういうのもあるので、吉田町にいる皆さんが、誰一人取り残さ

れないような温かい町になってほしいという思いを込めて、基本方針のところにどこか加えてもらえるとありがたいなと思いました。

○北澤委員

私も誰一人取り残さないというところがすごく、自分の中でもそう思っていかなければいけないなというのを感じているので。すごく今人口がすごく減っていく。これから先も減り続けていくと言って、まあ出生率をね、上げたいというのもあるのかもしれないのですが、今やっぱり生を受けた人たちの中で生きづらいと感じる世の中が、あってはいけないなというのを、やはり最近すごくいろいろな事件なり問題が起こって感じるので。そういった１人で悩むような、１人で抱えるような。それこそ学問でも、やっぱり取り残さないものというのが大事で。やっぱり取り残された子というのは、そこから這い上がるのもなかなか大変で。それこそ楽しく学ぶという部分ができないのではないかなというのも、親としても感じてきたので。そういった中で生まれた者が、自分の生涯を全うできる学びの場として、社会が認めてくれる世の中になっていけばいいなというのをすごく感じるので。この中にも入っているのですが。今一度、今言われているＬＧＢＴ、人権問題でもそうですが、男女共同参画でもそうですが、ここにもあるのですが国籍がね、この吉田町で生まれた外国の方もいらっしゃると思うんですけど。そういった中でどんな境遇であったとしても、同じ社会で生きているという、その共同性をしっかりと教育として身に付けられる吉田町であってほしいなというのをすごく感じているので。そこの部分を少し強く出してもらいたいなと感じます。

○山田教育長

今出てきた誰一人取り残さないとか、生きづらい世の中にならないとか、外国籍の問題も含めて。そうしたことを考えると、今ダイバーシティとか、多様性を認める社会っていうことが言われていて。一人一人のというふうなことを大事にしていこうと思えば、当然授業にしても、一斉授業だけでは追い付いていけない。個々に対応しなければいけないというようなところになってくるので。そういう一人一人を大事にしながら、多様性を認めて、いわゆる共生社会みたいなところで生きていくという子供たちを、どうやって育てていくのかというところが必要になるのだろうと。

確かな学力という、随分前から、学力の前に確かなって付けて文科省が規定をしていったと。確かな学力というのは、知識・技能という狭いところだけではなく、思考力や判断力や表現力、それから学びに向かう姿勢。そういったところも含めて学力なのだと。学ぶ意欲をどうやって測るかというのは、非常に難しい部

分ではありますけど。結局先ほどまで皆さんが言っていた幸福度、ウェルビーイングというそういうところにつながっていくところがあって。やっぱり学ぶことが楽しいっていうふうに思えるような感覚。それが一つウェルビーイングにもつながっているのではないかと思いました。そうした意味では、多様性を認めながら共生社会の中で生きていくというようなところが、我々のこういう施策の中でも何らかの形では反映をさせていかなければいけないのかなって思っています。

基本方針、今のところは、現行では五つありますが、冒頭に言ったように学校教育だけで完結するものではなくて、生涯にわたりにということなので、いろいろな要素を入れなきゃいけないだろうなとは思いますけど。そういったものがここで基本方針を立てていくことが、どの年代の人たちにもウェルビーイングにつながるようなものになるといいなと思いました。

〇田村町長

昔ね、普通に言われていたことなのですが、小学校とか中学校の中でよく学びよく遊び、これは基本的に教育の神髄だと思うのですが。よく学んで、よく勉強して、体を鍛える。要はですね、小学校とか中学校でやる教育としては、目標として自分で考える、自分の体を作る。そういうのを自分の生活の中に据え付ける。単純な話一生涯学んでいく。一生涯体を鍛えて、強い体になっていく。これみんな基本的なことなんですよね。そういうことと同時に、もう一つ大事なことは、やっぱり多様性を考えた場合に、いろいろな人がいると。まず認めると。やっぱり人の心に寄り添えるというのが、基本的に非常に大事になってくると思うんですね。で、自分の幸せを求めると同時に、やはり誰一人取り残さない。人の心に寄り添える人間が求められる時代になっているものですから、人の心に寄り添うということをですね、小さい時から、小学校の時から人の気持ち、人が喜んでいたら喜べよ、人が悲しんでいたら悲しんでやれよと、そういうふうな非常に単純かもしれないけれども、やはりよく学び、よく遊び、人の心に寄り添うことができる、そういう人間を作っていってもらいたいなと。己には厳しく、人には優しくなど、いろいろな言い方があるでしょうけど。そういうふうなことをやることによって、社会というものが円滑というか、上手くいった社会になっていくのではないかなと。単純なのですが、基本方針などそういう中に落とし込んだらいいんじゃないかと思うのですが。

〇塚本委員

８年前に教育大綱を初めて作った時に、会津の藩の訓のようなものを作るのかなあという話をしたのを私覚えているのですが。今おっしゃったようなとこ

ろは、基本方針のこの表現になって、一言で「ならぬものはならぬ」じゃないけれども、そういうのが表せるものがあると、すごい何かずっとつながっていく、吉田町としてはこういうことをこういう人づくりを目指しているというのが明確になるとは私も思います。なので、分かりやすく単純化された方がいのではないかという気がしますけど。いい言葉が思い浮かばないのですが。でもああいう目標の方が分かりはいいというか。

○田村町長
　会津藩もそうですし、海軍兵学校の己に恥づることなかりしかとか、何か自分に厳しく、他人には優しくって言うんですかね。そういう分かりやすい表現にした方がいいような感じがしますね。

○中村委員
　あまり具体的すぎるとね、大綱となると作りにくいだろうなと思うんですよね。大綱なので、大枠でないと。これというふうにピンポイントにしてしまうと、分かりはいいんだけれども、具体的すぎるので。やっぱり自分は先ほどの誰一人取り残さないと言うか、外国の方が多くなってきているというのは、やっぱり気になっていて。つい最近も、学校の事務の方で、外国人に上手く事務のことが伝えられないというような、困っているという状況があるので。それは事務が困っているだけじゃなくて、外国の方も困っている、２人同時に困っているんですよね。そういう状況が何とかならないかなというのは、常々思うところですね。そういった状況というか、そういったものが解決すれば、割合スムーズに行くところが、言葉が上手く通じないということだけで、ちょっと残念な状況かなと。そういうことも大綱の中で少しこの中にも入ってはいるのですが。性別、国籍、障害の有無などにかかわらず、誰もが個性と能力を十分発揮できるようにとなっているのですが、そういったものが実現できるといいかなと思うんですが。

○田村町長
　北澤委員はどうですか。

○北澤委員
　先日も静岡新聞で、女性の管理職の割合とかって出ていましたけど。やっぱり目が行くというのがあって。吉田町は高くて、３０％超えている印象があったのですが。誰もが社会に出ることができる時代になっているので、そういった面では男性も女性も、特に若い世代の子たちは、あまり関係なく感じているのかなというのもあって、やっぱり声を上げることも皆さんできるようになってきてい

るので。誰もが自分の人権をしっかり大切にして、自分がおかしいと思ったことは、声に出してというのができる世の中になってきたなというのも感じている反面、やはりそれこそ自分だけではなく、それに伴って周りの人のことも考えられるような人間でありたいなというのも感じます。

○田村町長
　今、小学校や中学校で、そういうことはどうですか。

○山田教育長
　今そういう壁というのは、随分なくなってきているのだろうと思いますけどね。一時期体育の授業についても、男女別であったのが男女共習になったり、学級の名簿が男女別だったのが、それがもう全て男子も女子もなくなって、逆に今はキラキラネームで男性か女性か分かりにくくなりましたけどね。教員の採用試験なども、性別を記入する欄がなくなりましたし。いろいろなところで制度的には変わってきているというのがあって。もちろんいろいろな役割の中で、すごく力強いことが必要な時には、男性が活躍するしというふうに、その場その場の中で、それぞれの特徴を生かしたというようなことはあると思いますけど。今はもう学校の中でも、男女の別ということがすごく意識されているかというと、随分それは一昔前に比べたらなくなってきているのではないかなと私は思っています。

○田村町長
　ただあれですね。男女で最も違うのは、やっぱり女性だけしか、生むのは女性だけなんですよね。子供を産むということが、女性のキャリア形成などで結構マイナスに作用することが多いですよね。だから、女性が生きやすい社会を作っていくというのは、一つあるかもしれないですね。女性が生きやすい、働きやすい社会というのは、男性もおそらく生きやすい、働きやすい社会じゃないかなという感じがしますね。ハンディキャップを女性だけに負わせるという。
今の若い夫婦というのは、普通にやるんですね。男が普通に料理を作ったりとか。非常に変わってきていますね。そういう若い世代でも、やはり女性はハンデが。そういう日本の社会を変えていかないと。今、多様性とかで実質なくなってくるんですよね。そんな感じがするんですけど。

○増田委員
　子供らを見ていると、意識は明らかに変わっていると思います。障害を持っている子供への接し方も全く普通、ニュートラルですよね。子供に教わることが多

いなと感じます。学校の場って女性も多いので、比較的一般的なところよりも、性差という意識は少ないのかなと思います。子供たちを教える時もそうです。今教育長が言ったとおり、だいぶ変わってきているので。男女の違いというのは、できるだけ意識させないような取組というのが、かなり前から取り組んできているので、変わってきていると思います。

○田村町長
　性差を感じさせない教育というのは、結構学校の中では大きな力を持ってきたと。しかし、現実的に社会に出てしまうと、まだまだ男性社会ですよね。

○増田委員
　社会はそうですね。

○田村町長
　そういうのについては、小学校、中学校でどうやって教えるのですか。

○山田教育長
　もちろん男女共同参画社会というのは、学校の授業の中でも家庭科もそうだし、社会科もそうだし、いろいろなところで指導する場面はあるのですが。学校の生活の中では、同じ子供同士の中で、いろいろな意見を言って、いろいろな役割を担っているという時に、女性の方がしっかりしていて、女性がいろいろなところで実行委員長なんかもやって活躍する場面なんかは、学校生活ではたくさんあるんですよ。ただ、社会に出ていった時に、それこそ子供が生まれて家庭の生活があってとなった時に、家庭の生活の中と、その働く環境の中でのというところでの、いろいろなせめぎ合いというか、そういったものの中でなかなか苦しんでいるところは、まあ現実の問題としてはあるのだろうなと思います。だから、随分管理職的なところについても、女性の割合というのは増えてきているので。学校の中で言えば、校長とか教頭とかっていう管理職の割合も、女性の割合が随分この１０年の中でも増えてきていますね。

○田村町長
　皆さんの方で付け加えたいことはございますか。

○塚本委員
　先ほどの町長の寄り添うというところの話なのですが。ある学校訪問をこの間教育委員会でした時に、最近学校訪問時に道徳の授業をやっていないことが

多いなと思うことがあって、質問をさせてもらったのですが。道徳が教科にされて、評価もするという中で、始まって何年か経って、評価の仕方も安定しないというか、模索しながら先生たちもやっていると思うのですが。そもそも道徳が教科になるということは、今の男女共同参画も含めてなのですが、人に寄り添う、気持ちに寄り添うというのがすごく大切なことなのだというのが言われているから、そういう教育になってきたと思うので。その辺どこかで触れるような形にした方が、よりいいのではないかという気がするので、この今基本方針、重点施策の中に、人の心に寄り添うというのが、どの辺になるのか。さっきのね、国籍や性別にというところは、基本方針の２番の重点施策に入っているところなのですが。人の心に寄り添うという大切なことだと思うので、どこかに加えることができたらなと思います。

○増田委員
　大きい概念なので、この目標の中の文章にふさわしいのかなと、今考えたんですけどね。入れられないのかなと。

○塚本委員
　一つにしない方が、全体に掛かってくる方がいいということかと。

○田村町長
　他に皆さんありますか。皆さんから様々な御意見をいただきありがとうございます。それでは次期吉田町教育大綱について、皆さんからいただいた御意見を反映しながら策定するということでよろしいでしょうか。皆さんに御了解をいただきましたので、事務局はそのとおり進めてください。よろしくお願いします。

⑵　ＴＣＰトリビンスプランについて

○田村町長
　では次に、「ＴＣＰトリビンスプランについて」を議題としたいと思います。事務局に説明を求めます。

○事務局
　それでは私、粂田から、ＴＣＰトリビンスプランについて御説明させていただきます。資料は、資料№.１と資料№.４から９になります。
　ＴＣＰトリビンスプランは、教職員、子供、保護者の三者が、共に利益を得て、三者共益となるよう、町の教育方針として定めたもので、平成２９年２月の総合

教育会議において合意され、実施してきたプランであります。
その後、令和３年度の総合教育会議において、令和５年度までを一区切りとして、プランを継続していくことを御承認いただき、本年度が最終年度となることから、令和６年度以降のプランについて、本年度、検討したいと考えております。
それでは、先程の資料№１のスケジュール案を再度、御覧いただきたいと思います。プランを取りまとめるまでの、おおよそのスケジュールでございますが、先程、教育大綱の時に御説明させていただいた会議や委員会に加え、一番下の欄のＴＣＰトリビンスプラン実施委員会を年２回開催し、それぞれにおける協議を経まして、教育委員及び教育推進委員会の意見を取り入れたプラン案を取りまとめる予定となっております。
その後については、先程の大綱の説明と同じになりますが、そのプラン案について、１１月に開催予定の第２回総合教育会議において、御協議いただいた上で、おおむねのプラン案を取りまとめ、さらにパブリックコメントを経て、町民の皆様の意見を取り入れた最終案を取りまとめ、最後に３月に開催予定の第３回総合教育会議において協議いただいた上で、決定したいと考えております。
本日は、これまで実施してきたＴＣＰトリビンスプランに掲げていた、目標、指標、その実績値を再度御確認いただき、また、昨年、一昨年と行った教職員及び保護者のアンケート、それから先日行った教職員の最新のアンケート結果を御報告させていただき、令和６年度以降のプランの方向性について、委員の皆様に御協議いただければと思いますので、よろしくお願いします。
まずは、資料４になりますが、こちらは、ＴＣＰトリビンスプランで謳っている３つの柱と、これを支える基盤的整備を示している概要版となります。
資料５は、このプランを評価し、今後の方向性を決めていく表となりますが、網掛けの部分に、プランの３つの柱に掲げた目標と指標が記載されてございます。
１つ目の子供の「確かな学力」を保障する環境づくりには、目標として、「質の高い授業の実現による子供の学力の向上」、指標１としまして、「全国学力・学習状況調査の平均正答率が県平均以上」、指標２としまして、「中学校における県学力調査の平均正答率が県平均以上」を掲げております。
資料６に平成２５年度から令和４年度までの、全国学力・学習状況調査の平均正答率の静岡県との比較がグラフにしてありますが、表の中で青色に着色されているものが、県平均を上回った時となりますので、その時のその教科につきましは、指標に達していることになりますが、着色がなく、マイナスの表示があるものは、県平均以下ということになりますので、指標には達していないということになります。
経年で見ていきますと、小学校は、およそ隔年で県平均以上となっており、中

学校は、残念ながら、一度も県平均に達していないという状況になります。県平均に達していない中学校ではありますが、徐々に平均値に近くなっており、令和３年度は平均値に一番近い値まで来ていたところでしたが、昨年度、また下がってしまったという結果となっております。

また、指標２の中学校における県学力調査の平均正答率の県平均以上についてですが、県学調の当町の結果については、公表しないこととしておりますので、ここで数値を明らかにすることはできませんが、吉田中の平均点と県の平均点とを比較しますと、残念ながら、県平均に達していない結果となっております。

次に、資料５にお戻りいただいて、２つ目の「教職員が授業等に専念できる環境づくり」には、目標として、「教職員の働き方改革による超過勤務時間の縮減」、指標１としまして、「超過勤務時間が月８０時間を超える教職員数：０人」、指標２としまして、「月当たりの超過勤務時間の年間平均：４５時間」を掲げております。

これに関しては、資料７を御覧いただきたいと思います。「時間外勤務時間が１か月当たり８０時間を超えた教職員人数の推移」というページを御覧いただきたいと思いますが、１が平均人数、２がその割合を表しております。

指標としては、８０時間を超える教職員は０人としており、令和４年度までで０人になってはいませんが、平成２８年度から比較すると大きく人数が減っております。ただし、令和４年度の中学校については、コロナで活動していなかった部活動が再開されたことから少し増えている状況にあります。

しかしながら、この中学校の増加数は、コロナ前の令和元年度の数値よりは、大幅に少ないと見てとれますので、削減の効果は出ていると捉えております。

また、裏面の２ページを御覧いただきますと、こちらは、教員１人当たりの時間外勤務時間数の推移となります。

真ん中のグラフ２を御覧いただきますと、こちらが「１か月の平均時間数」となりますが、小学校については、指標となる４５時間を令和４年度に切っている結果となり、目標とする超過勤務時間の縮減は、認められると言えます。中学校についても、４５時間以内を切ってはおりませんが、これまでの推移をみると、働き方改革は、ある程度認められるのではないかと考えます。

次に、３つ目の「保護者（家庭）の教育ニーズに応じた環境づくり」については、資料№５にお戻りいただいて、目標として、「保護者の期待に応える学校教育の実現」を掲げており、指標１としまして、「保護者の学校教育に対する満足度：８０％以上」を掲げております。

これについては、資料はありませんが、例えば、企画課で昨年度実施した住民意識調査の項目で「小中学校での学校教育」に対して「満足」か「やや満足」で回答した割合の合計が７１．６％となっていますので、これを指標とすれば８

０％には到達していないことになりますが、資料№８－２にある令和３、４年に行った保護者アンケートを御覧いただきますと、肯定的回答が８０％を超えているものがほとんどであるため、こうした視点を考慮すれば、この指標に達しているとも言えるのではないかなと思います。

只今申し上げましたプランの３つの柱の目標と指標に対する実績内容、資料№８－１と８―２になりますが、令和３、４年に教職員と保護者に対して行ったＴＣＰトリビンスプランの施策に関するアンケート結果が、満足度が高かったことなどを踏まえまして、委員の皆様から御意見をいただきたいと思います。

その前に、資料№９になりますが、本年４月下旬から５月中旬まで、教職員に対して、現在のプランの目標や指標、施策の内容について、変更したい内容を記載してもらうアンケートを実施しましたので、主席指導主事から報告させていただきます。

それでは、引き続いて資料№９のアンケートについて報告をいたします。本アンケートは、現行のプランに掲げた「目標及びその指標」「具体的な施策」の各内容について、変更したい内容等について記述してもらったものです。

まず、目標１とその指標についてです。目標１の２つの指標に対しては、１ページ目にありますように、「平均を指標とすることには疑問」という意見が出されていました。これらの意見は、平均を上げるということが目的化してしまうことにより、授業がテスト対策に走ってしまわないかということへの懸念でありますとか、また、２つ目にありますように、今求められている「主体的に学び続ける力をもった子供を育成する」ことに迫る授業という視点からとらえた時、平均を上げるというだけの指標でよいかという意見が出されています。

いずれにしても、「目指す子供の学力とは何か」、先程教育大綱のところでも、どういう力を付けるのかということがあったと思うのですが、授業で目指す子供の学力とは何かをもう一度明確に捉えることが大切ではないかとまとめていて感じました。

なお、アンケート内の代替案としては、吉田町が独自に目標とすべき数値を設定するでありますとか、目標とする正答率を子供や保護者が設定し、個々に達成度を検証するとか、年度当初と年度末などの変容を見るなどが、現実的にできるかどうかは別として、どういった案が代替案として出されています。

なお、アンケートではありませんが、先日行われたＴＣＰ実施委員会では、全国学力学調における吉田町の平均を県と比較する指標は残しつつも、さらに主体的に学びに向かう姿勢や学びの実感を指標に加えてはどうかという案も出されていました。

２ページ目からは、目標２についてです。目標２については、指標２として「超過勤務時間の年間平均を４５時間以内」と設定していることに対し、「賛成」と

いう意見と「疑問である」という意見が出されています。成果については、先程課長から説明したように、その指標の成果としては上がっているのですけれども、賛成の意見としては、４５時間を時間の目安としてやっていくことは、自分の働き方を見直すきっかけとなるとか、教職員の労働を管理する上で、働く時間の管理は基本であるという意見。一方、反対の意見と言うかそれを指標とすることについて疑問に思うような意見については、残業時間が長いイコール悪という考え方になりかねないのではないかという意見、あるいは、やる仕事はたくさんある中、時間にこだわると、職員の士気の低下を招くのではないかというような意見も出されていました。

アンケートの中には、その他、「働き方への効果的なクラウド活用」「働き方改革の進捗と現状」等の意見が出されております。

この目標に対する指標の新たな設定案、代替案としては、残業時間などの数値ではなく、教員の心理面での安定ややりがい等の指標とするということも、案として出されています。

最後に、目標３についてですけれども、３ページの最後を御覧ください。ここでは、大きく「保護者の期待とは何か」「保護者への情報発信について」の２つの視点での意見が寄せられています。目標はともかくとして、設定されている指標が、目標１や目標２の指標と比較すると、やや抽象的であることへの指摘として捉えました。

４ページ目からは「具体的な施策」についての意見です。施策については、資料№.４にもありますように、たくさんありますので、ここでは本プランの根幹となる「授業日の平準化」にのみ触れたいと思います。

資料№.４を御覧いただいても分かりますように、「授業日の平準化」は、平準化によって放課後の時間の生み出すことによって、３つの柱「確かな学力保障」「教職員の授業への専念」「保護者の教育ニーズ」それぞれの環境づくり全てに関わる施策となっています。それぞれの３つの柱に対する「授業日の平準化」への意見は、資料№.９の４ページ、６ページ、７ページに記載されていますが、ねらいのとおり、放課後の時間の生み出しは教材研究の時間に有効であるとか、時間的ゆとりが精神的な余裕につながっているなど、肯定的な意見の一方で、生み出された時間が、会議や打ち合わせ等の時間に使われてしまい、十分な効果を上げていないという意見もありました。ただ、資料№.８－１を御覧いただいても分かりますように、授業日の平準化についての令和３年度、４年度の評価については、「確かな学力保障への環境づくり」「教職員が授業に専念する環境づくり」ともに８０％をほぼ超え、肯定的な意見が多数を占めているということは事実です。一方で、アンケートにもあるような現場の教職員が少なからず感じている否定的な現実があるとするならば、それが学校による運営の仕方によって改善で

きるものなのか、改善に向けて行政サイドから少しやることがあるのか、そこについては今後分析していく必要はあるのではないかなと思いました。

授業日の平準化を中心に、施策についてのアンケート結果を報告してまいりましたが、全体を通して校務アシスタントやＩＣＴ支援員の配置、ＣＳ（コミュニティ・スクール）の推進などのいわゆる人的配置に関わるもの、それからＩＣＴ環境の整備とか、快適な学習環境の整備等の物的整備については、肯定的な意見が寄せられております。

以上、概要ということで、先日実施した教職員アンケート結果の報告とさせていただきました。

○田村町長

説明が終わりました。それではこれから、御意見を伺い、協議していきたいと思いますが、最初に、策定スケジュールと策定方法については、事務局が提示した案のとおりでよろしいでしょうか。分かりました。では、そのとおりで行きたいと思います。それでは次に、令和６年度以降のプランにつきましては、現行プランの「三者共益」を目指すという考え方を引き続き継続していきたいと思いますが、この点について、教育委員の皆さんから最初に御意見を伺いたいと思います。

○塚本委員

三者共益を目指すというのは、継続していったらいいのではないかと思っています。ただ、前にも一度言ったことがあるのですが、子供の教育のためのプランなので、方向的には子供、教職員、保護者全員対等ではなくて、子供たちを健やかに育むための三者共益であるという位置づけは明確にするような表現ができないかと思っています。ただ、この３つの関わる人たちが、全て幸せになれるようにというのはいいことだと思います。継続してやるべきだと思います。

○増田委員

プランについての基本軸は、これを継続するべきだと思います。ただ、資料の４ですか、トリビンスプラン全体を見て、この５年と来年からの５年で、変えるべきところがいくつかあるなと思います。校務の支援のところで部活動のことがありますが、これから大きく変わっていくと思いますので、この表現を変える必要があるなということと。先ほどの資料９のアンケートの中に、平準化について肯定的意見は多かったものの、否定的意見として、会議とか打ち合わせにかなり時間を取られるというところで、私もそこが心配なところでした。トリビンスプランの真ん中のエですかね。（２）のエの町全教職員研修会の実施というのを、

今一度検討すべきではないかなと思いました。負担に思っている先生が多いのであれば、やり方を変えるとか、そういうことが必要なのではないかと個人的に思いました。

あと、アンケートにもある（１）のウのプログラミング教育の充実というところも、今一度先生方の御意見を聞いて、重点目標とすべきなのかどうかは、検討すべきかなと思いました。

あと、トリビンスプランの（４）の基盤的整備の中で、最も今後重要だなと思うのが、コミュニティスクールの充実だと思いますので。他のものと並立するのではなくて、ここをもう少し強調できる表現にできないかなとは思いました。

○中村委員

三者共益という視点ですよね。これは、そういう視点を持って取り組もうとするのは、教育大綱は教育大綱でかなり大きめなので、義務教育に特化してこういった集中して目標をつくっていくと。その目標が、視点３つあるということは、分かりやすくていいことではないかと思います。それについて指標を設けていることも、大事なことではないかなということで。

ただ、４年経って、それからＩＣＴ機器も充実してきて、さあ、今からという時になって、やらなければいけないことが、だいぶ変わってきているのかなと思います。先ほど話がありましたが、プログラミング教育というよりは、デジタルを活用した、文科省で言うと、デジタル活用とリアル活動の最適な組み合わせの授業って書いてあるのですが。それを最適なものになっていくようなことになっていってきているので、そういったところは直していく必要があるだろうなと思います。

○北澤委員

トリビンスプランは、このままでいけばいいかなというのが正直な意見なのですが。特に、保護者のアンケートを見る限り、肯定的な意見が挙がってきているというのが、すごく保護者の方も感じてくださっているのかなと思います。先ほど塚本委員が言われたとおり、三者共益なのですが、結局は子供のために、子供に返せるようなものになっていけるといいと思うプランなので。まず、家庭が子供を安心して預けられる教育環境が整ってくれているという安心感を持っていただくことと、それこそ子供の、ここで言えば給食が多いというところで、保護者としても負担軽減になっているというのは、決して楽をしているわけではなく、その分の時間を子供に向けていただければというのと。それこそお父さん、お母さんも働いている家庭が多いので、そういった家庭の環境の安心感というものを、子供も感じてもらえればなというのを感じるので。すごく肯定的な意見

が保護者のアンケートから取れて良かったなというのを感じました。
　あと、子供たちが確かな学力を身に付ける上では、国が出すものに関しては、しっかりと把握して、これも時代背景があると思うのですが。子供たちが今学ばなければいけないと思うものが出されているわけなので。それをしっかり踏まえたものをここで充実させて。まだプログラミング教育もしっかりと定着させるという意味でも必要なのかなと。ただ、使うものに関しては、変わっていく部分ではあるので、中身の充実性は、どんどんアップデートしていけたらなと感じます。教職員に関しても、質の高い授業と先生の方からも出ているのですが、そういったものをつくれる環境を、上手く時間を生み出す部分に関しては、働く人、先生だけではなくて、どんな職業に就いている方もそうなのですが、やっぱり自分の働き方を見直すことがすごく重要だというのが言われている中なので、もう一度二極化している部分が見えてきているので、そういったことはしっかりカバーしつつ、今、吉田町でできることはしっかりと。これは本当に先生たちのフォローに、助けになっている部分であると感じているので、継続のままでいっていただければなと感じています。

〇山田教育長
　三者共益の理念を、これを継続していいかどうかっていうことに関しては、結論的には継続していってはどうかと思います。この三者にとってプラスになるような施策を打っていくというのは、ある意味当たり前といれば当たり前で、どこの市町でもそうしたことは、念頭に置きながらやっているのだと思うのですが。吉田町がそのことをちゃんと打ち出して明文化をして、行動化しているものですから、これは私もいろいろな場で他の市町の教育長と話をした時に、この前もちょっと発表させてもらったのですが。整理をされているので、とても伝えやすいものでした。その根底にあるのは、例えば教職員にとってといっても、教職員だけが幸せな、ある意味、楽をするような受け止められ方ではなくて、冒頭、塚本委員が言ったように、最終的には子供に返っていくものであると。子供の成長に返っていくものであるというのは押さえた上で、この三者共益の理念を継続していくことに関しては、先ほどの教育大綱で出たウェルビーイングと同じで、理念としては継続していってはどうかなと思います。

〇田村町長
　私も基本的には三者共益が、よく明文化されていると思います。やはりメインは塚本委員がおっしゃっている、子供が確かな学力を学ぶ環境をやるためには、先生が授業に専念できる体制を作ると。そこには家庭のそれなりのニーズであるとか、家庭においての必要性を考えた結果、多く食べるものを作っていくとい

うのですけれども。最終的にあとは単純な話、じゃあ子供が確かな学力を身に付けた。じゃあ先生が授業に専念できる環境ができた時に、結果をどう評価するのだという指数や指標の問題になってきちゃうんですね、どうしても。そういうふうなものを、どんな形で次のレベルに移したときにやっていくかということだと思うんですよね。基本的に、私は三者共益でよろしいと思いますけど。よろしいですか。ありがとうございました。それではですね、現行プランの三者共益を目指す考え方を引き続き継続していくとしたいと思います。

では、令和６年度以降のプランとして、教育委員の皆さんからもっと充実した方が良いこと、もっと改善した方が良いこと、新たにプランに盛り込むことが望ましいことなどの意見をお伺いしたいと思います。よろしくお願いします。まず最初は、塚本さんから。

〇塚本委員

先ほど既に中村委員や増田委員からありましたが、子供の確かな学力を保障する環境づくりのプログラミング教育の充実のところは、実態として今デジタルのＩＣＴを活用した教育が推進されているので、そちらを充実させていくというような表現が適当ではないかと思っています。そういった意味では、今やっていることで、既にパッと変えられるようなものは変えたらいいと思いますけど。４番の基盤整備のところが、町の方でものすごく予算付けを早くやってくれたものですから、ほぼ全て整備されているという状況だと思うんですね。そういった意味では、新しい何かがあるのかというのはちょっと分からないのですが。新しいことを、是非現場で必要なことがあればそちらを整備していただいて、より良い環境にしてもらえたらなと思います。

指標の問題は、後で出てくると思うのですが。ここに関しては、また意見を言わせてもらえればと。資料５で指標の面でこれでいいのかという話が出てくると思うんですが。やっぱり先生たちのアンケートを見ても、指標をどうするべきかという意見は出ていますが、こうせざるを得ないような気がするんですね。全国学力・学習状況調査が、国が求めている力が、確かな学力が付いていると測る一定の指標になり得るという判断は、間違いじゃないと思うので。そこで平均以上の点を取っていると、力が付いているというのは、これを間違いだというと、それが正しい指標じゃないと言われると、じゃあ何が指標だという話に当然なるわけで。これ以外にないんじゃないかという気がしているので、この平均以上の得点を、是非付けれるような力を付けてもらいたいと思います。

〇増田委員

トリビンスプランでは、さっきの繰り返しになるのですが、一番コミュニティ

スクールの整備というところが、非常にこれからますます、充実ですかね、コミュニティスクールを充実させるための整備というのが必要になってくると思うので。まずは（４）の基盤的整備については、そこに重点を置いた表現がいいかなと思いました。（１）についてはプログラミング教育の充実というところを、ちょっと表現を改めるように再考が必要かと思います。（２）については、校務の支援。さっき言った部活動支援員の配置というところが変わってくるのではないかと。あと全町職員研修会の実施については、今一度先生の御意見を伺って、この実施については検討すべきだなと思いました。

○中村委員

大枠で言うと、ここに書かれているのは推進が多くて、推進ではなくて、充実というふうに変わっていくのかなというようなことを思っています。あとは、気になったのは指導か支援かというのも、少し文言を整理する必要があるとも思いました。個に応じた支援、指導。でも、外国児童の方には支援が必要で、その支援を充実する方がいいのだろうなと。文言の整理は必要になってくるかなと思っています。あと、保護者のニーズに応じた環境づくりについては、問題のない教育環境の実現って確かにそうなのだけど、そんなことないよなって思うと、教育課題に速やかに応じる環境が欲しいのではないかなと思います。なくならないものなのでというところはあります。基盤整備については、ハード面では、ある程度切り替えというか、買ったものは新しくなっていくことも考えなければいけないとは思うのですが、それと同時に、ハードから今度はソフトの充実ということが求められてくるのかなと。デジタル教科書みたいなものがだいぶ盛んになってきているので、そういった面の整備ということが求められるのではないかなと思います。

○北澤委員

アンケートの結果をよく見てしまうのですが、今度は教職員の方の研修の満足度を見ると高いと思うんですよね。それが上がっているというのが。それで、内容が充実しているのかなと最近思ったりしています。それこそ、平井先生が主になってやってくださっているＩＣＴの飛躍的な、吉田町は全国でも群を抜いているかなというのもすごく感じていて。先生たちもそれを感じているからこそ、学びたいというのが日々出ているのかなというのがあって。それはすごく伸ばしたいし、支援していきたい部分ではあるのですが。やっぱり時間には制限があるというので、やはりそういったところがストレスに感じるというのは、やはり出てくるとは思うのですが。個々のそれこそ学びにはなってしまう部分はあるのですが、それ以上に、対応もどこでも、研修もその場に行かなくても、リア

ルタイムで見られたり、後で配信で見られたりというのがあるというので、すごくそういうのが活用されているというところが私はすごいなと。そこを上手く先生達が、自分の時間をマネジメントしながら、取り入れていける環境ができるのかできないのかという今のその実態を知りたいなというのを感じています。

吉田町は、整備の部分では、ＩＣＴもすごく早くて、やっぱり使っていくというと、パソコンなどはどんどん新しいものが出てきてしまって、ソフトに対してもそうなのですが。新しいものというのが出てくるということで、そういったものも少し先を見て、子供たちや学校に供給できる体制というのが整っているとありがたいなというのを感じました。子供たちが本当に新しいものを取り入れた環境の中で、どう学ぶ、どう触るかというのもあると思うのですが、それは本当に先生達の研修体制が、必要だなと思うので、そういった面でどういう支援がこれから必要になるのかというのも、そこももう少し具体的に先生達の声が拾えたらなと感じます。

全国の学力調査の指標に関しては、素人なので疑問があるのですが。吉田町は、そもそも、では県平均は上回ることが難しい町なのかというのを聞きたい。私は学業に関して素人なのであれなのですが、そもそも吉田町の中学校は１校しかないのですが、その中学校が県平均を上回ること自体は難しいことなのか。専門家から見てそれは難しいことなんですよ。それを私たちが言っているから、先生たちが否定的に言うんですよというなら分かるのですが。どうなんでしょうかというのを少し感じています。

小学校の方は、少しグラフを見た感じだと上がっている部分があって。それは、先生達はどうしてそうやって緩やかであっても上がっていっているというのは、自分達の中でもこういうことを変えていったとかというのが、ちゃんと結果を見て研修されて出ているのかというのを、もう少しそこの声を聞きたいですね。

○山田教育長

今、委員の皆さんがいろいろ話をした中で、一つ思ったのは、資料№.９は、さっき説明があって、増田委員も全教職員研修会への負担のような意見がありましたが。実は、この資料№.９というのは、ＡＢＣＤ評価ではなくて、思っていることを書いてもらうというようなことだったので、もちろん肯定的にも否定的にも、両面で書いてくれてあるのですが。特に今のままでいいやって思っている人は、何も書いていないというようなものが、当然この中にはあります。ですので、強く声にして言おうとしている表れが、こういうところに出ているのだろうなとは思います。

一方で、先ほど北澤委員も数字的なものと言いましたが、資料の８－１の裏側のところに、上の方の（４）、ちょうど真ん中あたりに（４）ってあって、全教

職員研修会やＩＣＴ研修、その他、各主任レベルの研修会は、教職員の資質能力の向上につながっているかどうかというところの教職員の評価としては、Ｂが非常に多いですが、ＡとＢを合わせたのを肯定的な評価だと捉えるならば、令和３年度から令和４年度に比べて上がっていると。なので、資料№９の方の声でそういう声があったから、全教職員研修会は否定的なのかというと、数字的なものを見れば、概ね効果があるというふうに見ているというところだと思うんですね。なので、文章でそういう言葉が書かれているから、じゃあこれはやめましょうという話には、直結はしないだろうと思っています。なので、今やっていることが１００％いいかどうかということは、毎年検証しながらより良い形に変えていかなければいけないと思いますが、アンケートの採り方によってですね、どういうふうに声を聞き取るのかというところの難しさがあるなと思います。

個別のことも、いろいろ委員の方からも御意見が出てきていますが、例えば、基盤的な整備のところは、いろいろ条件的に予算を付けてやってきていて、ほぼ完了しているようなものが多いかと思うのですが、完了しているから、このＴＣＰトリビンスプランの表面の中から外しちゃおうかと言うと、ある意味、吉田町がやっている良さであって、売りの部分でもあるんですね。端末なんかは、１人１台ちゃんと整備をしましたが、今後、更新作業というのが、もう近い将来に出てきます。そこにまたお金を掛けなければいけないということも出てきて。こういうハード的な部分というのは、当然年数が経てば劣化をしていって、整備をしていかなければいけない、維持管理の方が入ってきますので。そうした意味では吉田町の売りとして、今後こういった環境というのは、整えていくのだという部分に、表現的に入れていく分にはいいのかなと自分は思っています。

ソフト的な部分でどうするかというのは、いろいろ難しいところがあるのですが、先ほど、保護者のところに、問題行動のない落ち着いたというのが文言的に話題になりましたが、困り感を持っている親というのは少なからずいて。相談はしたいというような思いを持っている人がいるので、この括弧の中に相談体制の充実というのがありますが、要は保護者の子供たちに、先ほど寄り添うという言葉が教育大綱に出ていましたが、そういうような体制づくりというのは、行政側としても必要になってくる部分なのだろうなと思います。

一つひとつのことに関しては、今後現状をどうやって踏まえて、今後新たにどういったことを入れていけばいいかというのは、また検討が必要になってくるだろうと思います。例えば、言葉一つ取った時に、授業日の平準化という平準化と言っていますが、現実的に平準化という言葉が適切なのかどうなのかという、括弧書きで放課後時間の生み出しと書いてありますが、言いたいのはやっぱりそこだと思うんですね。今４時間日をつくって、子供に向き合う時間をつくる、仕事に向かう時間をつくるっていうようなことだとかも、放課後の時間の生み

出しをしているところなのだと思いますので、平準化という言葉が適切かどうかというのも、ちょっと検討材料かなと思います。

それと、今、皆さんの方から指標の話が出ましたが。これは資料№.９の教職員の中でも、一番最初の目標のところから、平均を指標とすることは疑問であるということが出てきていますが、ひょっとしたら目標と指標という考え方が、捉え違いをしていないかなというのを、自分はちょっと思っていて。目標はあくまでも、質の高い授業の実現による子供の学力の向上なのだと。子供の学力を上げていく、自分としては学力の前に「確かな」を入れたいのですが。確かな学力の向上を目指していくのだということが一つの目標になって、それを何をして測るかという時に出てくるのが指標だと思うんですね。

で、今はどうも指標が目標化しているというか、県の平均を上回ることが目標だとなっている可能性が高いかなと思っています。学力の向上を図るという目標のために何を見るかという時に、学調の状況はどうなのだというのが一つの指標になってくるのだろうと思います。

そうやって考えていった時に、私は確かな学力という言い方をしましたが、現状全国学調の県平均以上、北澤委員は、さっきそれが適当かどうかという疑問を言われましたが、一番最初は、全国平均以上が一つの指標だったんですね。その全国平均という指標から、県平均以上というふうに４年前に変わった。そこの変わったのはなぜかというと、全国平均はある程度カバーできるようになってきたので、更に全国平均よりも高い県平均を目指してはどうだというふうに、８年前から４年前に変わったと思うんですよ。なので、そうした意味では、徐々にではあっても、この全国学調との点数、平均正答率の比較に関しては、徐々に上がってきたという経緯はあるのだと思います。私は学力を上げるという意味での指標としては、その全国学調というのは全国的に出ている数字ですので、知識・理解の部分とか、思考力、判断力の部分では測る指標の一つだろうと思います。

一方で、さっきから言っている確かなという意味では、学ぶ意欲というところが出ているので、例えばですね、私、中学校だけ取り上げる指標の２というのはなくてもいいかなと思っているのですが、今年の全国学調の生徒の質問紙の中に、授業では課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組んでいたというようなアンケート項目があります。なので、自分から取り組んでいたという、そういうようないわゆる学ぶ意欲的なところというのはどうなんだと。自ら学ぼうという意欲というのはどうなのだということも、例えばこの指標の２のところに変えて入れていくことも考えられるのではないかなと思いました。指標の１と２という２本立てでいってはどうかなと。

それとか、目標の２で教職員の超過勤務の時間の目標がありますが、その時間とともに、教職員がやりがいというか、働きがいを持って仕事をやってもらいた

いなという願いを自分は持っていますので、そうしたこれは主観的な評価になるとは思いますけど、やりがいとか働きがいというのを教職員が感じているかどうか。そうしたこともこの指標の１と指標の２と分けてみてはどうかなと思いました。子供と教職員のそのあたりの評価については、そうした客観的な数字と、主観的な評価という２本立てを考えていってはどうかなと思いました。

〇田村町長

皆さんの中からも意見が出なかったのですが、２、３日前に出生数が出ましたよね。７７万７４７人。これ合計特殊出生率が、１．２６。人口置換水準が２．０７。１．２６を２．０７で割ると、大体６０なんですよ。単純に今の世代がいわゆる次の世代に行く時に、６０％になっちゃうんですね。べらぼうに減っていくわけですよ。何が言いたいかというと、基本的に都市間競争がものすごい勢いで激化していくんですよ。増田寛也さんの「地方消滅」がありますけど、あれで言うと、一つの例で言うと隣の牧之原市とうちとどうなるか。ほとんど変わりません、人口は。そういう中で、例えば指標を県平均以上の平均正答率として、例えば、教職員の異動というものが基本的には榛原地区とか何とかっていう単位で一般的にいくんですよね。そうすると、いい先生はもう出せなくなるんですよ。うちの町のそういう教育機器のツールを使った、パソコンとか使った教育というのはかなりのレベルできるんですよ。他の町からは羨ましいと言われる。本当にこの先生は、出せなくなるんですから。何を言いたいかというと、いい先生の囲い込みが始まるんですよ。いいも悪いもないですよ、これ。そういうふうな流れの中で、みんなで榛原地区が平均的に行けばいいのかというと、そうはならないですよね。いい先生の囲い込みであるとか、いい教育環境を整備するとか、そういうことはどういうことかというと、単純な話、都市間競争に吉田町が生き残れるのかどうか。そういうことが底流に流れてるんですよ。これ逃れられないですよ。

例えば、一つの例で言いますとね、うちの町は福岡県の八女市といろいろな交流をしています。福岡県の八女市にですね、今までは、つい数年前までは全部公立学校。そこに私立の中高一貫ができた瞬間に何が起きたかというと、公立学校の崩壊ですよ。頭のいいところ、そういうより高いレベルの教育を求めると、ぜんぶそちらに行ってしまう、そういう事象が起きる。そういう時代なんですね。だから、そういう時代というのを無視はできないですよ。そうするとね、何らかの形での指標を、ある程度分かるような指標を具体的に出していかないと、引っ張れなくなってしまう。確かに弊害があることは事実なんです。弊害があってもね、それをやっていかないと、町の教育というものが、他のいわゆる市町の教育と比較される時代になったんです。だから、極端なことを言うと、親が子供に残

せるものは何かというと、子供に対して教育をやるのが最大の子供に対する投資だと。よりいいところに行くって分かりきっているんですよ。だから、教育環境を整備する。プログラムの教育もそうです。これにいい先生。よりいい教育環境。要は囲い込みが始まってきているという、そういう時代背景があるということなんですね。逃れられないんですよ。

一つの例として、良い先生をこの町から出せないですよ、はっきり言って。こういう時代になってきちゃったんですよ。だから、そういうふうなことをね、考慮していかないと、吉田町の教育って素晴らしいという教育を施してもらう。それはどういうふうな教育なのかというのを具体的にそういうふうな現在の都市間競争の中で行われていることを踏まえながらも考えてもらいたいと思うんですね。平均的な教育というのは、なかなかできなくなってきているということなんですね。確かに、人事行政をやったうちの教育長に言わせると、なかなか難しいと思うんだけど。そういう考え方に来ちゃったということなんですよね。吉田町のより良い教育とは、どういう教育なのか。子供たちにどういう教育を施せばいいのか。そのためには、先生方の教育の、ぱっというと、どういうふうにすればいいのか。だから、教育を施すような環境とかね。そういうことにある程度具体的に考えなければいけない時代になってしまった。だから、弊害はあるにしても、指標というのはある程度具体的なものでないとどうにもならない。そういう時代になってきたということは、是非とも考えていただきたいと思います。そういうことを踏まえて、皆さんの方から何か御意見があれば。

○塚本委員

全国学調を確かな学力が付いているかどうかの指標にして８年ですか。残念な結果ですけど、その間アンケートを採ると、今、町長がおっしゃったような、今日出ているようなアンケートの結果を先生たちから出されて、ある程度現場で求めている形を優先して。中間テストをやって把握したいとか、そういうのもやってきたのですが、なかなか成果として現れないというのは数字に表れていると判断せざるを得ないと思うんですね。なので、ここでは点数を取ってくれというのを私は言いたいし、言ってきたし、これからも言い続けるしかないと思っているのですが。先生の質を上げるために、例えば民間企業だったらＭＢＡを取らせるとか、研修に行かせるとか、経理だったら簿記を取らせるとか、そういうスキルをアップさせるものがあるのですが。先生というのは、何かそういう特別な資格を取って先生のスキル、教えるためのスキルがアップするということがあるのか分からないのですが。そういったものがあるのかどうか一つ気になる。あったらそういうのを受けさせて、学力を付けさせるスキルを上げてほしいというか。町としてできるのは、そういうことしかできないのかなと。人事に関す

ることはなかなか難しいので。吉田町に来たら、先生としての能力が上がって、子供たちの学力を上げることができる先生になれるという売りというか、そういう町になったらいいなと思っているのですが。そういうのがあるのか聞いてみたいのですが。

○中村委員

それはないですよね。研修会そのものをやっているところはあるはあるんですよね。例えば、ＩＣＴの研修会をやるとかっていうのはあるのですが。じゃあそれをやったからってそんなに技能が上がるかというと、知識はある程度増えるだろうけれども、明日から目に見えて変わるっていう、そういうものでもないような気がするんですよね。やっぱりある意味職人芸みたいなところもあるので。１０年やったってベテランではないですもんね。中堅ぐらいにしか言われないので。でも、１０年やってすごく上手くやれる人もいれば、１０年やってもあまりパッとしない人も現実にはあるので。そこは本人の努力みたいなところもあると思うんですね。研修をやらせたからどうのこうのという、外圧的にどうのこうのじゃなくて、その方が先生として幸せになれるかどうかを自分で真剣に考えているかに関わってくる気がするんですけどね。やっぱり上手く教えられれば楽しいし、面白いですもんね。

○塚本委員

民間企業だと、会社は利益を上げなきゃならないので、いい人材を採ろうと思うし、いい人材じゃなくても人がなければ採るのですが。そうしたら何をするかというと、教育をするしかないし。その時に、よりどころになるのは、この会社をどういう会社にしたいのかという目標がきっちりしているかどうかだと思うんですよ。先生の世界って、吉田町で言うと、僕、吉田の教育委員長をやった時に挨拶をしたことがあるのですが。吉田町に来た以上は、吉田町のやり方に従ってもらいたいというつもりで言ったんですよ。吉田町になって、いいスキルを身に付けて、力のある先生になって他の市町に行って、それでまた帰ってきてくださいと。そのために吉田町は、先生をやる環境を整える準備がありますというつもりでいたのですが。なかなか先生は、先程中村委員のおっしゃった自分の幸せもそうなのですが、先生として能力があれば、吉田町じゃないところに行っても能力が高ければ、それだけの豊かな教員生活が送られるわけですね。なのに、それができないというのは、吉田町としてというか、学校教育の中で、この町としての明確な目標、会社で言えば会社の目標ですよね、どんな会社にしたいのか。それが学校を見に行くと、学校方針とか、教育目標とか、いろいろな標語があって、細かく枝分かれした木になっていたりするのですが。一つ、吉田町に来たら

豊かな教員生活が送れる教員になれる、それを育てると言うか。そういうことってできないんですかね、教育界では。役所もどうかわからない、民間ではないので、どういう目標とか、町民に奉仕するとか分からないですけど、ありますよね。そういうのが学校の場合、さっきトリビンスプランの時に言ったように、吉田町の子供のために、教育を、確かな学力を付けるために仕事をしてもらいたい。そのための環境整備をしますという流れで言ったんですけど。そこが共有できないというのが歯がゆいし、共有できないのはなぜなのか。ヒエラルキーの中でね、方針として示しているのに、もっと強く言う目標がね。そのために吉田町で先生をやっているんですよって言わなきゃならないのか。分かっているけどできないのか。分かっているけどやらないのかというところがちょっと気になるのですが。

○中村委員

それについては答えようが。だって、誰もが上手くなりたいと思っているし、それなりに努力はしているし。それで全教職員研修会まで開いたりして、向上には努めているわけで。それが子供たちに本当に返っていないのか自体も分からないと言うか。もちろん平均には行っていないんですけどね。それは現実としてあるし、その指標を僕も残しておくべきだろうなとは思うのですが。だからといって、先生に力が付いていないかというのとは、単純に相関関係があるかというと、それはちょっと分からないかなと思うし。人によっては、やっぱり教える上手さの場所が違ったりするので。やっぱり心を養うのが上手い人もいるし。教えるのが上手いのもいるし。人間関係を取り持ったりとか、主体性を育てるのが比較的得意な人もいたりとか、その特徴も全部が全部すごく全般的にいいというばかりの人じゃない。だから、そこら辺はじゃあここはその指標がそうだからといって、じゃあ駄目かって言われると、それはちょっとどうなのかなという思いがあります。

○田村町長

教職員が授業等に専念できる環境って、先生が先生として子供たちに教えるわけですよね。より高いレベル、より高い資質の先生になっていってもらいたいわけですよね。その結果として、子供たちもより高く行くんでしょと思うんだけど。そこはどうなのですか。先生のレベルと向上というのは、子供たちの教育が結び付かないのですか。非常に難しいことだと思いますけどね。会社だって必ずありますよね。会社というものは、利益ですから。利益を上げるために教育、そういうふうなことをやりますよね。先生の世界の結果とは、何なんですか。また非常に難しい問題に入っちゃっていて。結果としては。

○塚本委員
　毎年この数字を出して、悔しいと思っているかどうかということですよね。これは町の教育委員会が勝手にやっていることで、まあ残念だったねという話になっているのか。僕らからすると、吉田の子供たちを預けていて、何とか力を付けてさせてもらいたい。県平均、全国平均ぐらいは、せめてと思っているけれども。それが８年間、９年間と続いてくると。

○田村町長
　私は、残念ですね。本当にそう思います。塚本さんがおっしゃるとおり、なんでいくらやってもうちは県平均に行かないのと、素朴な疑問が出てきますもんね。そうすると、最後はこんな意見になってくるんですよ。新井紀子さんが言うような、基本的には文章読んでも理解できない子供が多いんだ。文章を読んで理解できる子供をつくればいいじゃないかとなっちゃうんですよね。だから、文章を読んでも理解できない子供がいることは、結果そういうことですね。

○中村委員
　それはそうだと思いますね。

○田村町長
　文章を読んで理解できるような子供をつくるためには、先生はどういう教育をしてくれるのですかってなっちゃうんですよね。具体的に言うとですよね。

○山田教育長
　数値で結果として出るので、そのことだけを責められれば、教員としたら非常につらいというのはあると思います。私はさっきも言ったように、目標は子供の確かな学力の向上であると。で、確かな学力が身に付いたかどうかというのを測る材料として、指標を持っている。結果的にはその指標として、県平均にいったかどうかところが、ある意味どこまで到達できているかというところで、言葉は悪いのですが、駄目じゃないかになってしまえば、学校としても非常に困ったなと、つらいなという話になるのですが。では、どうしていけばいいのかという時に、さっきの教育大綱の話に戻りますけど、誰一人取り残さないっていうような言葉が出ている、その個々の状況を把握しながら、まあ分からない、困っている子にどうやって関わっていくのか。ある程度できている子であっても、満点じゃないといったら、その子たちを更にどうやって伸ばしていくかという、個々への関わりというのをどうしていくのかというところが、学校に課せられている今の使命なのだろうと思います。もちろん平均なので、できる子もいればできない

子もいる。で、できる子も頑張れば平均は上がる。全体が少しでも上がっていけば、平均は必ず上がるはずなので。その全体の底上げとともに、なかなか理解が不十分な子を伸ばし、できる子はできる子で更に伸ばしという形で、対応していくしかないかなと思うんですよね。結果としていい結果が出ていけば、それはそれで満足かもしれないですけれども。目の前の子供たちにどうやってかかわっていくかというところが、まあ、教員としたら毎日精一杯やらなければいけないことなのだろうなと。点数を上げるという感覚よりも、今、目の前にいる子供たちが何に困って、どういう状態なのかということに、精一杯関わっていくところに我々は指導をしていかなければいけないのだろうと思いますけどね。

なので、確かに結果は出てほしいのですが、そこだけを常に言うよりは、やっぱり目の前の子供は一体どうなんだというところを、強調をしていきたいなと思っています。現実問題、うちの指導主事が学校によく訪問して、教員の授業を見ながらアドバイスをしていますが。そういう機会をやっぱり大事にしながら、それが一人一人の教員の力も伸ばしていくところの関わりを、継続をしていくしかないかなと思います。

○田村町長

民間企業の経営者は、どうですか。

○塚本委員

そのアクションはいつからやっていて、今やっているのかやっていないのかって、その先には学力が付いてくるっていう見通しがあって、そうやるって言っているのかっていうのがね。目の前にある、当然関わって力を伸ばすことをやってほしいのですが、その継続の先に力が付いた学力向上の姿があるというならば、どういう年数で、これプランなので、どこに行ったらという目標なり、具体的にその取組はどういう形でつなげていくことが、力が付くことにつながりますって言い切れるのかどうかだと思うんですよ。力が付いているかどうかは、点数によって測れるので。そこが見えないと、点数だけ取ればいいと言っているわけじゃないので、当然そういう子供たち一人一人に、真摯に向き合ってほしいというのは当然のことなのですが。そうしていけば、子供たちも先生も力が付いて、更にはそれがこういう数字でも見えるようになるというようなことで、目標を立てていいのかということですよね。

○田村町長

増田さんどうですか。

○増田委員
　難しいですね。客観的指標はもちろん必要ですが、そんなに即効性のあるものではないと僕は思っていて。だから、長期的に見て上がっているのであれば、それは上がっていくのではないかと僕は思うのですが。ちょっと物足りないのかもしれませんけど。あと、その客観的な指標もそうですし、教育長がおっしゃった主観的指標というのも、僕は知りたいなと思いました。

○塚本委員
　両方入れるのがいいですね。評価していいところ。すごくいい数字もあるんですよね、吉田町の学習状況調査で。ずば抜けていい、地域を愛する気持ちとか、ものすごくいいんですよね。ああいうのも継続していくことが地域愛。優しい子も多いんですよね。人に対して。そういう数値も並行して出していくというのがいいかもしれないですね。

○田村町長
　自分で考えることができて、自分でいろいろ勉強して、結果として点数が上がってくれれば一番いいですよね。両立すればね。

○塚本委員
　それは共有しているということでいいですよね。この間、部活動の在り方協議会があったんですけど、余談ですが。特にどういう形があるかという理想的な形。子供たちがどんなスポーツや文化的活動も自由に選べて、楽しくそこで活動ができて、先生はもちろん負担がなくて、充実した時間が過ごせて、その子供たちが中にはプロになる子もいたり、芸術家になる子もいたり、そうじゃないけど、一生涯を通じて自分の趣味として、絵を描くのが好きで、豊かな人生を送る子ができればいいと。何となく理想があると、じゃあそのためにどうすればいいのかという話になると思うので。今、町長がおっしゃったようなことが共有できるかどうかという話で。

○田村町長
　この問題は、おそらく議論の終結はないと思いますね。非常に難しいのでしょうけども。時間も来ましたのでね。皆さんからいただいた意見を、反映しながらプランを検討していくと、そんなところで落としたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしいですか。では、皆さんから了解をいただきましたので、事務局はそのとおりに進めてください。皆さんどうもありがとうございました

それでは、以上で、本日の全ての議事を終了しますので、進行を事務局に返します。

３　閉会

〇事務局

委員の皆さんにつきましては、長時間にわたり誠にありがとうございました。以上をもちまして、令和５年度第１回吉田町総合教育会議を閉会します。最後に相互のあいさつを行いたいと思います。一同礼。